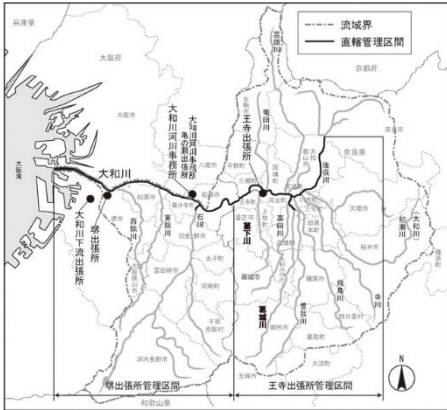


## 日本あちこち河川遡行記（第230回）

大阪2-1.石川（その2）平成31年2月5日（火）快晴



01.大和川流域図

2回目の石川遡行に出かける。今日は往復とも格安こだま切符が取れたので助かる。近鉄阿部野橋駅に来ると南大阪線の豪華特急の「青のシンフォニー」が5番線にいる。河内長野行き準急発車まで時間が有るので車内に入って見ることにする。古い時代の豪華なシートが3列並んでいる。濃紺の外観と落ち着いた車内はさすが近鉄特急である。通常の特急料金以外に特別列車料金が必要で、名阪アーバンライナーのデラックスシート（3列シート）と同じである。この特急は吉野まで1時間15分ほどの旅であるが飲食を用意しており2号車はスナックカーとなっている。



02.豪華特急「青のシンフォニー」がいた



03.緑の3列シートがゴージャスだ

10時27分「喜志」駅に着く。前回の文で「貴志」と打ち込んだが「喜志」の間違いであった。和歌山電鉄に「貴志」駅が有るのでそれと同じと思い込んでしまったようだ。PLの花火大会を石川で打ち上げると思っていたが、調べ

ると PL 教本部の広い公園敷地内で打ち上げていると知る。花火は川か海で打ち上げると思い込んでいたのが間違いの基であった。

駅前に富田林の観光絵地図が有ったのでカシャ。今日は富田林の端から端まで歩いて橋を調べるぞ。



04. 喜志駅前に有った富田林の絵地図

1kmほど南東に府道を歩く。最初の橋「河南橋」から調査を開始する。道路は府道であるが幅員が狭く、歩道も狭い。次の橋「喜志大橋」はこの府道のバイパスで幅員も広い。河川敷では数名の作業員が足場用単管を桁に取り付け作業をしている。塗膜の状態はそろそろ塗り替えを検討、準備する状態であるが主要地方道の橋ということで早めの塗り替えを決めたようだ。



05. 塗装塗り替えのための足場を組み始めた

左岸側の土手の自転車道を南に進む。西側には中小企業団地が続き、いろいろな製品を作る工場が有る。道の外側には桜が二列も植えられ豪華な道である桜並木の外側に小さな工場が並んでいるのも珍しい景色である。対岸には金剛山の西山腹から流れてきた「千早川」が合流している。この川も歩いてみたい川の一つである。



06. 桜が2列も並んだ自転車道



07. 南東から「千早川」が合流

南からの流れが緩やかに変わり南西からの流れとなる。やがてコンクリート主塔が際立つPC斜張橋の「石川サイクル橋」に着く。自転車道はこの橋を渡り右岸側を上流に向かう。ケーブルは各ケーブルが平行に張られたハープ形式で優雅な姿をしている。当方はそのまま左岸側の土手を進むことにする。



08. 「石川サイクル橋」はハープ形式のPC斜張橋

次の「新北橋」がおかしい。橋のこちら側4径間はごく普通のPC桁橋であるが、対岸側の2径間は鋼橋になっている。良く見ると橋脚の形が他とは異なり新しい。どうやら橋脚が増水時に洗堀を受け傾いたので脚と桁を復旧させたのだろう。PCにこだわらず工事が早く済む鋼橋にしたようだ。

南東方向の葛城山と金剛山は春を思わせる気候のせいで霞んで見える。汗が噴き出る遡行になった。



09. PC 橋の「新北橋」の右側 2 径間は  
鋼橋になっている



10. 春霞のような中に葛城山と金剛山  
が霞んでいる

府道 33 号の「金剛大橋」を診て一旦川から離れ富田林の街中の「寺内町」に向かう。せっかく富田林に来たのなら寺内町に立ち寄らないと。永禄年間から作られた「興正寺」を中心とした町は 17 世紀から明治にかけての町屋が多く残り、国の「重要伝統的建造物群保存地区」になっている。家々は姿、形は微妙に違うが統一された様式と同じ材料、色でまとまっている。

真宗の派である「興正派」の本山「興正寺」は京都の西本願寺の南に有るが、その別院がここで町を起こした。別院の前の道「城門筋」は「日本の道 100 選」に選ばれ、その銘板が寺の前の石柱に嵌められている。



11. 富田林に来たのなら寺内町に寄り  
なはれ



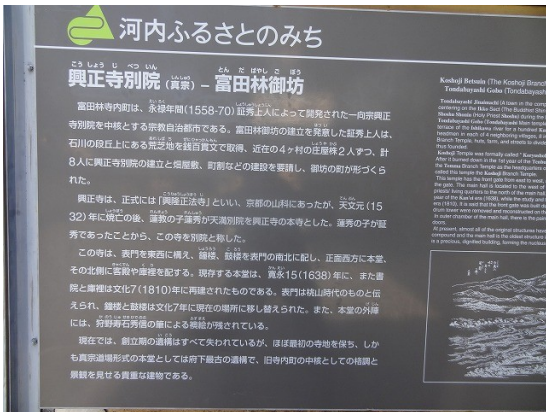
12. この家は「杉田家」



13.寺内町はこの「興正寺」を中心に出来た



14.この道は「日本の道100選」に選ばれた



15.興正寺別院と寺内町の解説が



16.寺の檼は太鼓檼だそうだ

町は木材（茶）、漆喰（白）そして瓦（灰）の3色のみの統一された色の連続である。サブモノトーンも良いもんだ。寺内町の主役の「旧杉山家」に向かう。富田林市のマンホールの絵柄に挿入されている家と想定していたが、ほんまもんが現れる。今は市が管理、運営しているようで400円を払って中に入る。寺内町にはかつての名産の木綿と酒造で栄え立派な町となった。戦国の世を生き抜くためのハード、ソフト両面の工夫が今の姿として残っている。屋敷内をザーッと見て町の外に出る。昼を摂れそうな店が無いので諦める。台地から川に向かえる道が無く暫し台地の上を南西に向かう。



17.電柱が無ければパーフェクトなんだが



18.町を代表する旧杉山家住宅に立ち寄る



19.マンホールの絵柄の本物が目の前に



20.住宅の解説が入り口に



21.寺内町は周囲に土居を巡らした集落だった



22.杉山家は酒造りで財を成した

台地のへりを歩いて行くといきなり学校が現れる。校門には富田林高校と中学の両方の名前が書いてある。府立の中高一貫校だ。我が母高は旧制1中であつたが、富田林は旧制8中で南河内の名門高である。街中に有るためか敷地が狭く校舎は大学のように高い建物が連なっている。



23.旧大阪第八中学の富田林高校は中高一貫校に

何とか川に戻ると下流側に水管橋が有る。近づいて見ると逆三角形パイプトラスの上に同じ形のトラスが乗っかっている。後から水道管を追加するためにトラスを追加したようだ。橋脚を見ればその事実が判明する。

市道橋に戻り対岸（右岸）に向かい後ろを見るとPL教団のユニークな塔が見える。ガウディも岡本太郎もびっくりするようなデザインの高い塔である。鉄骨の周りに多くのお餅をテンデンバラバラにくっ付けたような姿である。



24.「石川水管橋」は2階建て構造だ

25.西の丘の上にはPLの塔が聳える

再び自転車道の土手道を南西に進む。暑いのでセーターを脱ぎ軽装で歩く。西側の広大な丘陵地の雑木林は住宅地になり、富田林から大阪狭山市、堺市へと延々と続く。標高50～100mの丘陵は宅地にしやすいのだろう。大阪北部の千里丘陵よりも規模は大きそうで多摩丘陵に負けないくらいだ。川は幾分南方向からとなる。

「高橋」まで来ると丘が川に迫り行くては坂道となるので橋を渡り左岸側に向かうことにする。橋桁は先日見た橋と同じように橋脚幅と支承を減らすため桁の上に隣の桁が載る構造になっている。そのため桁高が幾分高めに見える。



26.「高橋」も支承を減らすため桁の上に桁を乗せているぞ

高橋を渡り左岸側に来ると土手道は無いので歩道の無い国道170号の旧道を歩く。古くからある道は両側に家並みが続く道幅が狭く、歩道が造れないのでやむを得ない。川の両側には丘陵と山が迫り、土手も無くなり上流の雰囲気が変わる。

次の「伏見堂大橋」を見て国道に戻ると河内長野市に入る。中流から上流への変換点が市境になっており、ごく自然な境界である。すぐに河内長野市のマ



ンホールが現れる。絵柄は市の木と花をあしらった無難な物である。木は楠、花は菊で菊水と楠で「楠木正成」を連想させる。



27.河内長野市の絵柄は市の木、楠と市の花、菊だ

緩い坂道を進み今日最後の橋「千代田橋」を見るため国道を左折し川に向かう。市道から東を見ると山の中腹にお寺が有る。五重塔が輝いている。一般的には平地の塔が多いが山の中の塔も良いものだ。

橋を見てUターンし国道傍の「汐の宮」駅に向かう。汐の宮とは優雅な駅名である。こじんまりとした駅舎はかつて歩いた香川県の琴電の駅に似ている。



28.「願昭寺」の五重塔が輝いている



29.近鉄長野線の「汐の宮」駅舎は琴電の駅に似ているな

近鉄長野線の富田林～長野間は単線になっている。15分ヘッドの阿部野橋行き準急が直ぐにやって来て乗車。「古市」で吉野からやって来た急行に乗り換える。急行は古市から阿部野までノンストップで走る。大和川を越えると阿部

野まで高い連続立体高架橋が続き、ぶっ飛ばす。民家の3階ぐらいの高さなので遥か遠くまでよく見える。「ハルカス」も近くに見える。

帰りのこだままで今日も時間が有るので近鉄本店の地下をうろうろする。今日も魚売り場ではだみ声のおっさんの声が響いている。阪神に負けへんで！

天然フグの横には長崎産の「くえ」が並んでいる。7切れの身とアラで何と6480円！隣のフグがびっくりしとるぞ。かつて博多で食べたことが有るが味は濃厚で関西人にはフグの方が性に合ってます。



30.これで6,480円！とても喰えまへん

本日の歩行距離：12.3km。調査した橋の数：13。

総歩行距離：10,284.7km。総調査橋数：12,845。

使用した1/25,000地形図：「古市」（和歌山5号-4）、「富田林」（和歌山6号-3）